

雑報

## 「ぐんまの自然の『いま』を伝える」：13年の歩みの成果と課題

姉崎智子

群馬県立自然史博物館：〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1  
(anezaki@gmnh.pref.gunma.jp)

**要旨：**「ぐんまの自然の『いま』を伝える」は、その開始から13年目をむかえた。その時間軸の中で大きくわけると5つのエポックを経験してきた。本稿では、13年の歩みを振り返り、今後の活動に生かすため、状況の変化に柔軟に対応、変化させてきた部分、大切に守ってきた部分について、その重要性と課題を整理した。

ぐんまの自然は、ばらばらだった点と点をつなげるように輪を広げ、参加者の声を受け止めながら、新たなインフラを創造、整備することの連続だった。小規模な報告会から始まり、やがてさらに広く一般に発信する特別展と報告会の開催へと形態が変化し、規模も内容の多様度も拡大した。その結果、対象とする内容、関係団体、事業形態、運営体制、運営方法に至るまで、初期の頃のかたちを留めていない。そのときどきの課題に柔軟かつ順応的に対応し、変化し続けることで、継続することができたのかもしれない。変わらないのは、いまある関係を深めながら新しい関係も築き、日頃から関係団体の熱意やエネルギーを受け止め、その魅力を学び、ともに歩み、それが私たちを育ててくれていることである。今後も関係団体や来館者の声を受け止めながら、より良いかたちを目指していくことが、持続可能な活動につながるものと考えられる。

キーワード：ぐんまの自然、生物多様性の保全、持続可能な社会

## The 13-year history of the Gunma no Shizen or The Natural History of Gunma, the achievements and challenges

ANEZAKI Tomoko

Gunma Museum of Natural History: 1674-1 Kamikuroiwa, Tomioka, Gunma 370-2345, Japan  
(anezaki@gmnh.pref.gunma.jp)

### はじめに

「ぐんまの自然の『いま』を伝える」(以下、ぐんまの自然)は2020年度に開催13年目をむかえた。小規模な報告会から始まり、やがてさらに広く一般に発信する特別展と報告会の開催へと形態が変化してきた。発信の内容も行政主体の鳥獣被害対策中心から、様々な活動を行う自然調査、自然保護団体による生物多様性モニタリングや保全活動へと変化してきた経過の中で、大きくわけると5つのエポックを経験してきた。そのたびに、参加者や関係団体の声を受けボトムアップ形式で修正・改善しながら継続してきた。本稿では、13年の歩みを振り返り、今後の活動に生かすため、状況の変化に柔軟に対応、変化させてきた部分、大切に守ってきた部分について、その重要性と課題を整理する。

### 実施概要と結果

#### 1 実施概要

##### 1-1 ぐんまの自然のはじまり

ぐんまの自然は、2008年度(2009年3月1日)に群馬県野生動物調査・対策報告会として始まった(表1-1)。そのきっかけは、鳥獣被害対策や自然保護活動の現場を中心に一般の方々から群馬県立自然史博物館の学芸員である筆者が、「行政は対策をしているのか?」、「行政がどのようなことをしているのかわからない」「自然史博物館はなにをやっているのか」等の厳しい意見を多数いただいたことによる。

これらを受け、筆者が県自然環境行政等の関係する部局の担当者(当時)に相談し、「群馬県内では、野生動物に係る様々な調査や対策が進められているが、その実情を知る機会は少ない。そのため、県内で行われている野生動物

表1-1 ぐんまの自然の歩み：参加団体等の傾向

年度	実施年月日	基調講演 特別講座	口頭 発表数	ポスター 発表数	参加団体	報告会 参加者数	来館者数	備考
2008	2009.3.1	-	15	-	8	140	-	
2009	2010.2.21	-	16	-	11	160	-	
2010	2011.3.21	-	-	-	7	-	-	東日本大震災により中止 要旨集を当館HPで公開
2011	2012.2.12	1	10	1	10	80	-	
2012	2013.2.9	1	7	28	17	129	-	報告会名称を「ぐんまの自然の『いま』を伝える」に変更することを提案 報告会愛称募集高校生の発表参加
2013	2014.2.16	1	-	23	18	-	-	大雪により延期 ポスター掲示 3.14-4.19 報告会愛称募集
2014	2015.2.15	-	6	48	32	120	-	20まるプロジェクト登録 報告会愛称募集、「ぐんまの自然の『いま』を伝える」で定着 展示における当館収蔵標本活用の呼びかけ
2015	2016.1.16-2016.2.21	1	5	59	42	130	10,263	
2016	2017.1.14-2017.2.19	1	5	50	37	100	11,792	希少動植物シンポジウム開催 2017.1.29 カッコソウ、ヒメギフチョウ、ミヤマシロチョウ、ヤリタナゴ、自然環境管理
2017	2018.1.13-2018.2.18	1	5	56	41	150	12,068	
2018	2019.1.19-2019.2.24	1	5	61	42	130	13,972	国連生物多様性の10年日本委員会 (UNDB-J) による連携事業に認定 ワークショップ「地域の自然と市民団体の活動」
2019	2020.1.11-2020.2.16	1	5	71	48	179	16,894	参加型展示 「きのこのお絵描き」群馬県野生きのこ同好会
2020	2021.1.23-2021.2.14	1	8	86	64	-	-	2021.1.19現在 新型コロナウイルス感染症拡大予防のための緊急事態宣言の発出により報告会は中止 口頭発表等の一部は展示室内で上映 参加型展示 「きのこの香り」群馬県野生きのこ同好会 ワークショップ 「森と自然の保育園」日本自然保育学会・学生ボランティア チーム'95

\*2008～2019年度：（群馬県，2009，2010，2011，2012，2013，2014，2015，2016，2018，2019，2020）に基づき作成。

に係る取り組みについて、関係者が参集し現時点で得られている知見や経験を共有すること」が必要と考えた。その結果、「群馬県が取り組んでいる野生動物に係る調査・対策について、一般の県民に伝える機会も少ないため、県の取り組みを紹介する。」ことを企画することとなった。本企画の目的を、「実際の対策につながる調査をする主体と、対策を実施すべき主体を明確にし、連携する体制をつくる。」（2008年度事業実施報告書より抜粋）と設定し、企画内容を博物館内の会議に諮ったが、鳥獣害対策は「博物館がやることなのか？」等の意見が出され、基礎調査と対策のバランスをとるなど幾度かの調整を経て最終的に博物館長（当時）の承認を得て実施してみるようになった。

第1回（2008年度）の報告会の運営体制は県自然環境課4名、県技術支援課2名、筆者を含む群馬県立自然史博物館学芸員2名であり、会場は当館の学習室を使用することとした。当館が会場となったのは、群馬県林業試験場長（当時）から「自然史博物館で実施できないのか」との提案があったことに加えて、当館所蔵の実物の野生動物剥製標本等を会場内に列品することが可能だったからである。関係所属間の調整は県自然環境課が行った。より多くの事例報告を幅広く紹介するため、検討の結果、口頭発表による報告会とすることとなった。報告会ではカワウ、アライグマ、ハクビシン、ツキノワグマ、ニホンザル、ネズミ、イノシ

シ、シカ等の鳥獣を対象に、県及び市町村の担当者によって15本の口頭発表が行われた（群馬県，2009）。参加者の6割以上が群馬県行政関係者であり、その他は群馬県猟友会関係者や、群馬県自然環境調査研究会、群馬県自然保護員、群馬県立尾瀬高等学校の学生一同、野生動物に関心のある大学生、隣県の野生動物調査・対策を行っている研究者や、その他一般の方々であった。各発表に対しては熱心な質問がだされ、とくに「研究のための研究ではなく、調査対策につながる調査研究が必要とされていることが、多々の発言の中にあつた。（中略）市町村の実務担当者の発表は、現場の生の声として重要な位置を占めた。」（2008年度事業実施報告書より抜粋）ことから、現場担当者しか知り得ない情報を発表の場で共有化していただくことも重要な柱の1つとなった。群馬県初の試みが終了するにあたり、会場内に次年度も継続を希望する雰囲気生まれたことが、第2回目（2009年度）の報告会開催実現につながった。しかしながら、第2回（2009年度）、第3回（2010年度）と報告会を構築していく時間軸の中で、全国的にも、また群馬県内においても鳥獣被害と対策の強化事業や研修会が展開されるようになり、鳥獣害に関する調査や対策については、広く一般に普及されるようになっていった。報告会の内容が、群馬県庁で毎年行われている農林水産業分野の試験研究員と普及指導員による県農林水産業関係機関成果発表会

表1-2 ぐんまの自然の歩み：エボックな出来事と内容の変遷

年度	エボックな出来事	基調講演／特別講座	発表傾向
2008	厳しい意見を受けて報告会を企画・開催		哺乳類、鳥類、鳥獣被害対策
2009			哺乳類、鳥類、ヤマビル、鳥獣被害対策
2010	COP10開催 群馬県庁でミニ展示「ぐんまの自然とめぐみ～生物多様性を持続させるために～」開催		哺乳類、堅果類豊凶調査、林業、鳥獣被害対策
2011	自然保護・保全活動を行っている団体を主体とする報告会に改変	群馬にサルがあらわれ始めたころ ー人里にあらわれはじめたころの生態・今の生態から読み解くサル対策ー	哺乳類、魚類、昆虫類、RDB、自然環境保全、鳥獣被害対策、自然系施設の取り組み
2012	ポスター発表本格開始 名称が、群馬県野生生物調査・対策報告会から「ぐんまの自然の「いま」を伝える」に変更となる	「今、ここから始める共生への歩み」 ～里山づくりにおける連携と役割分担～	哺乳類、魚類、昆虫類、鳥類、植生、自然環境保全、菌類、骨形態学、貝類、外来生物、自然環境調査・保全、RDB、種の保全、鳥獣被害対策
2013		ツキノワグマの話	哺乳類、魚類、昆虫類、貝類、自然環境調査・保全、植生、市民の自然しらべ、菌類、種の保全、森林再生、環境管理と環境利用、傷病鳥獣
2014			哺乳類、魚類、昆虫類、鳥類、貝類、水質調査、自然環境調査・保全、団体の活動紹介、植生回復、菌類、環境管理と環境利用、傷病鳥獣、地質
2015	特別展開始	シダ植物の全国分布調査とその意義～4700点から浮かび上がる日本地図～	哺乳類、魚類、昆虫類、鳥類、ブナ林再生、冬虫夏草、菌類、植物、植生、モニタリング、蘚苔類、団体の活動紹介、植生回復、両生爬虫類、外来生物、地域産型調査、教育普及、標準化と収蔵、博物館ボランティアの活動
2016	博物館基本構想ー群馬県立自然史博物館これからの10年ーの策定・公開20周年企画展開催	みんなで自然の「いま」を発信しよう	哺乳類、温泉生物、魚類、植物相、昆虫類、植物、種の保存、菌類、鳥類、ピジターセンター、エコパーク、ジオパーク、鳥獣被害対策、希少種の保護、蘚苔類、水質調査、団体活動紹介、傷病鳥獣、貝類、外来生物、地衣類、地質、両生爬虫類
2017	博物館専門委員からの意見	里山の生きものを見守る市民のちから～モニタリングサイト1000里地調査10年の歩みと市民調査の可能性～	哺乳類、鳥類、カビ類、魚類、モニタリングサイト、団体の活動紹介、エコパーク、生物多様性、傷病鳥獣、外来生物、湿原復元、森林管理と生物多様性、自然観察、自然環境保全、蘚苔類、種の保全、鳥獣被害対策、電気と自然、温泉微生物、菌類、カビ類、サイエンスとアートの協働、大学連携と環境教育、教育普及、地質、鉱物
2018	予算削減等による事業存続の可否	博物館における市民の参加・参画をめざして	哺乳類、魚類、蘚苔類、植物、種の保存、森のようちえん、生物多様性、団体の活動紹介、生物多様性復元、エコパーク、指標種管理、ジオパーク、自然環境調査・保全、両生爬虫類、身近な環境調査、外来生物、鳥類、傷病鳥獣、ジオツーリズム、教育普及、大学連携、古生物、アート思考、昆虫類、ヤマビル、鳥獣被害対策、植生、変形菌、堅果類豊凶調査、貝類、菌類、水雪藻類、鳥の骨をみる
2019		人と自然をつなぐ里地里山保全活動のあり方	哺乳類、甲殻類、外来生物、漁業、エコパーク、自然環境調査・保全、団体の活動紹介、台風被害、ジオパーク、昆虫類、種の保存、鳥獣被害対策、生物多様性、鳥類の骨格、傷病鳥獣、教育普及、実験教材、雷雲、自然環境調査・保全、蘚苔類、地衣類、植物、古生物、地質、菌類、アート発想
2020	新型コロナウイルス感染症拡大運営体制の大改変	森林と人間が共に健康にー群馬県における森林療法の可能性ー	哺乳類、甲殻類、外来生物、漁業、エコパーク、自然環境調査・保全、団体の活動紹介、台風被害、ジオパーク、昆虫類、種の保存、鳥獣被害対策、生物多様性、鳥類の骨格、傷病鳥獣、教育普及、実験教材、雷雲、自然環境調査・保全、蘚苔類、地衣類、植物、古生物、地質、菌類、アート発想、細菌類

\*2008～2019年度：(群馬県, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2018, 2019, 2020) に基づき作成。

とも重複するようになったため、これを継続するのであれば内容の差別化が必要であると考えていた。

### 1-2 生物多様性の普及

2010年10月に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)が、ぐんまの自然の最初の大きな転換期となった(表1-2)。生物多様性保全における自然と人の関わり的重要性が認識されるようになり、持続可能な社会の構築と自然環境保全への認識を高めていくことが求められるようになった。2010年9月11日～10月31日には群馬県庁においてミニ展示「ぐんまの自然とめぐみー生物多様性を持続させるためにー」を群馬県(群馬県立自然史博物館、群馬県環境森林部自然環境課)主催で開催した。展示では、本県の生物多様性の変遷と現状と、本県で行われている野生生物の保護・保全の取り組みを紹介した。生物多様性保全の普及ニーズの高まりに加えて、先述した報告会の内容の差別化の必要性、報告会関係所属の行政担当者の異動や退職、東関東大震災による第3回(2010年度)報告会の中止等が重なり、運営の体制や運営方法も含めて

内容の根本的な見直しを行った。

第4回(2011年度)報告会は「地域と密着して活動を続けるこれらの機関の方々が互いに出会い、ネットワークを形成していくなかで、その取り組みをより広く、一般の方々にもお伝えしたい」(群馬県, 2012)との思いをベースに、自然環境の調査、保全活動を行っている団体を主体とする報告会に改変して開催した。地域の自然を保全していくためには、地域の人々が地域の自然に愛着をもつていただくことが必要不可欠であるからである。また、生物多様性の調査や保全に行政区画は実のところあまり意味をもたないが、県立施設で行う事業であることから、その対象の中心を群馬県とした。なお、対象の中心を群馬県としたが、それ以外についても対象外としないことに留意する必要がある。運営体制としては、ぐんまの自然の事務局を当館に設置し、当館管理職(学芸次長、教育普及係長)が主担当、異動がない博物館学芸員(専門職)1名(筆者)が実務的な主として担当した。また、自然行政を掌る群馬県自然環境課、自然系の社会教育機関である群馬県立ぐんま昆虫の森との共催とした。運営方法は、数少ないボトムアップ式

鳥獣害対策の成功例である島根県美郷町や、ティール組織 (e.g. Laloux, 2014), NPO等をベースとした小規模経済 (e.g. Schumacher, 1993) 等を参考に、関係団体主体のボトムアップ形式とした。報告会の内容は、魚類、昆虫類、RDB、自然系施設の取り組み等に多岐にわたったが(群馬県, 2012)、来館者からはより広範囲の内容を時間を増やして展開して欲しい、関係者の中で一般の参加者が質問して良いかどうか迷った等、要望、課題も提示されたため、少しずつ対象分野を増やし(表1-2)、誰でもが質問しやすい雰囲気づくりに努めることにした。

第5回(2012年度)には基調講演とポスター発表を開始し(表1-1)、参加者や関係団体の声を受けながら、参加者にとってのより良い場づくりを目標に修正、改善を繰り返してきた。ぐんまの自然の名称も、参加者や関係団体から意見や募集を募り、報告会での参加者の承認をもって「群馬県野生生物調査・対策報告会」から「ぐんまの自然の「いま」を伝える」に変更した。

### 1-3 特別展への拡張

ぐんまの自然の2つめの大きな転換期は、ポスター発表を行った参加団体から「ポスター展示をもっと長く掲示し、一般の方々にも見てもらうことはできないか」との多数の意見を受けて開催することになった特別展である。第7回(2014年度)まで同時期に数年開催していた写真展の予算削減による中止にともない、第8回(2015年度)から、報告会において掲示する発表ポスターを「特別展」としてロングランで展示することにした。特別展としたため、展示物は参加団体の発表ポスターだけでなく、当館が収蔵する資料等を活用することで、広く一般に間口を広げることを意識した。

### 1-4 博物館基本構想

ぐんまの自然の3つめの転換期は、1) 当館20周年記念に策定した「博物館基本構想—群馬県立自然史博物館これからの10年—」の公表と、2) 20周年企画展開催による1年間の事業停止案、3) 2017年度自然史博物館活動の評価に対する博物館専門委員からの、「県民に対する「事業活動報告会」の開催」と「実際に語り合う機会を設けてはいかがでしょうか」(群馬県立自然史博物館, 2019)との意見である。

1) については、構想の中でぐんまの自然を人々の輪を創出する場として位置づけたことで、バックヤードからフロントヤードでの活動、ぐんまの自然での共有化、バックヤードへのフィードバックという博物館の循環を構築することができた。3) においては、ぐんまの自然において博

物館職員の調査研究の発表も積極的に推進することの支えとなった。しかし、2) については、第3回(2010年度)の東日本大震災による中止や、第6回(2013年度)の大雪による延期等、自然災害によるやむを得ない状況によるものではない事業停止案であった。特別展の開催を企画展示室で開始して2年目のことであり、このような事情と状況における事業停止は、その後の事業継続が困難になる可能性が高かったことから、20周年企画展を実施することになった企画展示室以外でぐんまの自然を実施するための会場を工夫することで継続開催した。

### 1-5 ぐんまの自然の存続

ぐんまの自然の4つめの転換期は、大幅な博物館の予算削減による事業存続の可否が問われた第11回(2018年度)である。職員の作業負担が増える、博物館の事業として実施することそのものに懐疑的等の博物館内部からの否定的な意見もあり、館内の会議等において存続についての議論が行われた。一方で、同年度には、10年以上にわたるこれまでの「官民学連携」の取り組みが地域の生物多様性保全向上に資するものとして認められ、国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)による連携事業に認定された。

### 1-6 新型コロナウイルス感染症拡大による運営内容の変更、ぐんまの自然を継続させるための新たな運営体制の出発

そして、2020年度現在、ぐんまの自然は5つめの転換期をむかえている。第13回(2020年度)は、2019年1月以降広がる新型コロナウイルス感染症拡大を受け、ぐんまの自然において人と人をつなげる重要な場となっていた報告会のポスターセッションのコアタイムを密を避けるために取りやめ、口頭発表枠を増やし、講演会場を学習室から隣接する文化ホールに変更する等して人の流れを分散化させる対応を行った。「多様な主体が集い繋がる場」が最も重要な要素であったのが、繋がることなく分散しなくてはならない事態となった。また、ぐんまの自然は、地形、地質、菌類、蘚苔類、地衣類、維管束植物、昆虫、魚類、鳥類、哺乳類等の自然史に関わる多様な分野を取り込む方向で充実化をはかってきた。社会教育機関として地域に必要とされる機関となれるよう、明確なビジョンと方向性を持ち、一貫して参加者主体のボトムアップ形式で、参加者とともに歩むスタイルをとってきた。図書館や科学館の社会的な成功事例を踏まえ、博物館が前面に出ることなく、裏方的なサポート役として存在させるようにしてきた。ただ、一方で、それまで博物館内の一部の人たちの協力によって

行う報告会イベント的な意味合いだったものから、職員全体で行う展示事業のような形態に形が変わってきたため、継続するのであれば、と、運営体制の見直しが行われた。これにより当館管理職2名、博物館学芸員（専門職）1名（筆者）の事業運営から、総括（学芸次長）を中心に、外部連携、報告会・イベント、展示室準備、広報の5つの作業グループに分割され、それぞれに責任者を配し、分業、連携する構成となった。

なお、2020年度の報告会は緊急事態宣言の発出により中止となり、特別展のみを開催することとなった。

## 2 「ぐんまの自然の『いま』を伝える」のデザイン

ぐんまの自然は、第1回（2008年度）から第3回（2010年度）は、当館学芸員（筆者）と県自然環境課担当者（当時）でプログラムを検討し、関係各所と調整しながら企画立案、実施を行ってきた。

第4回（2011年度）報告会における事業内容転換以降、ぐんまの自然は事務局を当館に置き、自然環境調査や保全活動を行っている団体、大学、研究機関、高校等と、自然保護行政を担っている県自然環境課、社会教育機関である群馬県立自然史博物館、群馬県立ぐんま昆虫の森の「官民学連携」によって運営してきた。参加団体には、参加・発表の依頼文を3所属連名で発している。

国内外の自然環境保全関係の事例等も検討し、長期継続を念頭に、ぐんまの自然は「多様な主体が集い繋がる場の創造」することを目的とした。参加者の声を最も大切とし、潜在的なニーズの発掘とサポートに努めることとした。参加者の自発的な思いや動きに寄り添いながらサポートすることが、参加者のモチベーションを維持し、長期継続の可能性を高めるためである。よって、運営側の都合を優先させるのではなく、可能なかぎり参加者に寄り添う順応的な対応を行うことを運営基本とした。

報告会＝生物多様性の坩堝と設定し、会場内で生物多様性を体感することをビジョンとした。また、地形、地質、古生物、菌類、細菌類、蘚苔類、地衣類、維管束植物、昆虫、魚類、鳥類、哺乳類、自然現象、気象、ジオダイバーシティー等の生物多様性とその成り立ちに関わる多様な分野の調査、研究や、これらを普及する多様な団体、活動や取り組みを一同に介し、団体間、参加者間、関係団体と一般参加者間、関係者と事務局間等のネットワークを構築することを目標とした。さらに、発表の中では、団体への加入の勧誘や物販は行わないこととした。

口頭発表は、「会場内で生物多様性を体感」することを踏まえ、多様な分野をカバーするようにした。とくに、普

段の暮らしの中で触れることが少ないであろうトピックも選択的にプログラムに入れるようにした。また、参加団体の声を聞きながら、最先端的な研究、地域に根ざした取り組み、次世代の取り組み等のバランスをとるようにした。

第5回（2012年度）から本格設置することとなったポスター展示は、上記「多様な主体が集い繋がる場の創造」のコンセプトに基づき、各ポスターの配置を、個々の参加団体の特性と内容に応じて最も化学反応が得られる効果が高いであろう位置関係に配置することとした。ポスターセッションにはコアタイムを設け、コミュニケーションをとりやすくした。また、第11回（2018年度）からはコアタイムを奇数・偶数の2部制にして、さらに柔軟にコミュニケーションをとりやすいよう改善した。

基調講演、特別講座は、参加団体がそれぞれの現場に持ち帰って、活動する時のヒントになるような内容を届けることをコンセプトに、参加団体が抱える悩み等を事前に把握し、それらを解決できるような内容や、グローバル、ローカルな視点と、実践的等の視点の両方を兼ね備える内容を検討することとした。

第8回（2015年度）から開始した特別展は、「多様な主体が集い繋がる場の創造」の輪を一般にも広げることを目標とした。報告会で参加団体が掲示する発表ポスターを主の展示物としているが、一般の来館者が観覧する「特別展」であることから、各団体が所蔵する標本の展示に加え、当館が所蔵する標本等の活用展示も呼びかけることにした。居心地の良い空間づくりを目指し、一般来館者の声を受けてハンズオン展示等も設置することとした。第12回（2019年度）からは参加団体企画による参加・体験型展示の設置・展開も呼びかけることにした。

ワークショップは、実施の希望があった場合、それぞれの団体の希望にあわせて日程などを設定することとした。

## 3 結果

第1回（2008年度）～第3回（2010年度）の報告会は、口頭発表数も二桁と多く、参加者数も多かった（表1-1）。報告の内容は、カワウ、アライグマ、ハクビシン、ツキノワグマ、ニホンザル、ネズミ、イノシシ、シカ等を対象とした鳥獣とその被害対策に関する内容が主体であった（表1-2）。「発表に対しては、熱心な質問がだされ、野生動物への関心の高さが再確認された。」（2008年度事業実施報告書より抜粋）。「定員100人の会場には約140人が詰め掛け、関心の高さを物語っていた」（読売新聞、2010）。

第4回（2011年度）の生物多様性の普及に事業内容を転換して以降は、口頭発表数を一桁にしぼり時間に余裕をも

表2 「ぐんまの自然の『いま』を伝える」報告会アンケート結果

年度	実施年月日	n	報告会が行われることを知っていた		報告会の内容について5段階スケールで					報告会は期待通りだったか			報告会から得られたことがあったか?			知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか?					
			yes	no	5	4	3	2	1	期待以上	期待通り	期待以下	情報・知見	知識に誤りがあったことへの気づき	情報なし	関心なし	取り組みに参加してみたい	自然について知りたい	身近な自然をみる	自然について考える	かわらない
2011	2012.2.12	45	34	7	33	2	5	0	3	13	30	2	41	0	4	0	-	-	-	-	-
2012	2013.2.9	27	25	2	25	1	1	0	0	5	21	0	23	0	4	0	-	-	-	-	-
2013	2014.2.16	44	-	-	32	2	5	0	3	13	29	2	40	0	4	0	-	-	-	-	-
2014	2015.2.15	37	30	6	34	3	0	0	0	6	31	0	36	0	0	1	7	21	7	1	0
2015	2016.1.16	82	56	22	18	60	3	0	1	23	56	1	76	2	1	1	22	40	12	5	3
2016	2017.1.14	34	32	1	7	22	0	0	0	6	33	0	28	1	0	0	6	17	2	2	0
2017	2018.1.13	34	29	5	12	22	0	0	0	9	25	0	33	1	0	0	13	19	5	0	0
2018	2019.1.19	61	-	-	12	22	0	0	0	9	25	0	53	2	4	1	20	29	19	2	0
2019	2020.1.11	70	-	-	22	14	6	0	0	-	-	-	61	5	1	0	22	27	12	5	1

\*2013年度は大雪により延期。ポスター掲示を3.14～4.19に行った。アンケートはポスター掲示スペースに設置。

\*\*2014年度、2018年度、2019年度はアンケートの設問に変更があった。

表4 「ぐんまの自然の『いま』を伝える」特別展アンケート結果

開催期間	n	特別展が開催されることを		展示内容について5段階スケールで					報告会は期待通りだったか			新たな知見を得たか?				得られた知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか?					
		知っていた	知らなかった	5	4	3	2	1	期待以上	期待通り	期待以下	新知見を得た	理解更新した	情報無	興味無	取り組みに参加してみたい	学びたいと思った	自然を体験したい	自然について考えるようになった	変わらない	
2015	2016.1.16-2016.2.21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2016	2017.1.14-2017.2.19	133	22	7	88	32	5	8	0	6	23	0	28	1	0	0	77	46	5	0	5
2017	2018.1.13-2018.2.18	188	12	58	91	69	20	3	5	63	95	13	141	22	8	10	39	74	31	15	8
2018	2019.1.19-2019.2.24	107	44	56	46	44	12	2	3	41	56	4	73	12	8	7	18	54	29	9	7
2019	2020.1.11-2020.2.16	70	-	-	22	41	6	0	0	27	43	0	61	5	1	0	22	27	12	5	1

表3 報告会アンケート結果：要望等の記述部分

年度	記述内容
2011	高校の生物部会など、若者の参加があるといいと思いました もっと時間をかけての説明・質疑応答 結果に対して印象を述べるのも大事だと思いますが、より科学的な分析に期待します 報告時間をもう少し長く、内容を濃く、 もっとゆっくり聞きたいので、開始時間を午前にしたらどうか 一つ一つが短くて残念
2012	報告会の案内を博物館のHPに、もう少しはよく掲載して欲しい
2013	*大雪により中止
2014	ポスター会場がせまい 発表の周知をはやめにしてほしい ポスター展示をこの場だけでなく、じっくり見られるよう数日設けて欲しい さらに参考になる発表を ガイドに活かせる話題、ネットワークを構築したい
2015	専門機関と高校生それぞれの熱心な研究成果を期待 今年の内容の未解決部分の解決をきたい 昨年より充実していた、さらなる発展を期待 博物館が連絡し、高校のクラブ活動の横野連携をとったらどうだろうか 若い人とベテランの発表をバランスよく組み合わせたい 来年も新しい知識が得られるよう、おもしろい発表をしてほしい
2016	社会が自然の大切さに気づく情報の発信 各保護団体の活動の活性化が増えること 発表時間が短く時間管理がまいりだった 後継者のもんだいは・・・です
2017	今回の研究を継続してもらい、その経過を知りたい 群馬県のレッドデータ関係について知りたい 若者が数多く参加していることは貴重なことだ、今後も続けて欲しい ポスターセッションの時間を拡充して欲しい 基調講演がとても参考になった 会場が混雑している
2018	森林活用についての報告 参加団体が増えると、いろいろな事が聞けてよいかと思う 今年行われた発表のより一年分の内容をふくめた新しい最新の発表 会場(展示)を広めに!! さらに身近なものを発表に取り入れてほしい 魚類の発表 群馬県の現状について知ることが大切なのでポスター発表の時間をもっとほしい
2019	県内における生態系関連活動の情報を得たいと思っていました 最新の研究による現状の知見や環境対策の現状 自然への知識、人との交流 新しい活動のヒントを得たい より新しいことを知れ、さらにおもしろくなっている 質疑応答の時間をもう少し長くして、もっとたくさんの方の意見を聞くこと 生物に片寄らず地質等の分野の過去と現在と未来に期待します 一日にして発表数を増やして、ポスターのじかんも増えたらうれしい 身近な平地の自然の変化。例えば水田や休耕田、耕作放棄地の植生の具合、外来生物(植物、動物)の変化等、詳しく知ってみたい 地質的なことを扱っている物も発表か展示があると良い 今回知ることのできなかったことを知りたい 県外との交流の実態を発表してほしい

表5 特別展アンケート結果：要望等の記述部分

年度	記述内容
2016	まだ聞いてない発表を聞いてみたい 近場の自然について詳しく知りたい
2017	石をテーマにして欲しい、群馬の鉱山、鉱物等 今と同じく実物をふまえた展示 鳥類関係について引き続き充実した展示を期待 群馬の民俗風習と自然の関係 富岡の自然、里山の保護 今回はいろいろな機関の目線から展示されていて大変興味深かった 多くの人が基礎研究に携わっている姿勢に感動しました
2018	自然を守るための対策 どうぶつのはくせいをふやしてほしい 子ども達ももっと興味を持てるような体験型のなにかがあると良い 雑草の名前を知りたい 体感(手にふれたり等)の設備がもう少しあればたのしい 今後も変わらず身近な展示をする もっと展示してある物が増えること 群馬の火山の歴史 群馬の野鳥をこのワンフロアをいっぱいにするくらいに展示してほしい
2019	色々な研究がされているのがわかり興味深かった 多くの研究があるがポスターのつくりかたにはやや疑問を感じる。もっとうまくつくれる 僕は植物に興味があるので、植物には興味を持ってました 以前から地元の自然観察会等に参加して興味をいだく様になり、また普段みられない物をみられてよかったです 群馬に住んでいながら、群馬の豊かな自然について知らないことがたくさんあることに気づかされたから 展示内容がむずかしい 字が多くて見るのに疲れる。もっとわかりやすく簡単に もう少し引きつけるような展示にした方がいい もう少し遊べる所や体験できる場をもうけた方がいいと思います 群馬の川にいる魚について 特別展で子供も楽しめるようなイベントを増やしてほしい

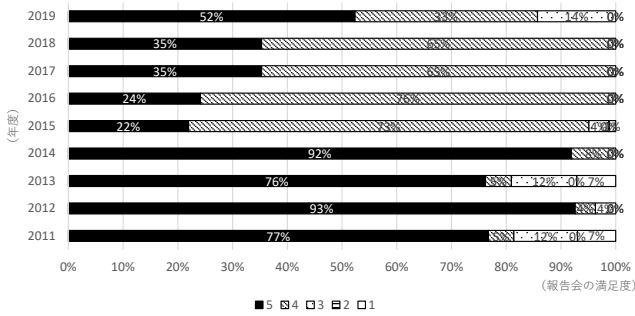


図1 報告会アンケート結果：5段階評価の満足度の傾向（5：とても満足，4：満足，3：ふつう，2：不満足，1：とても不満足）

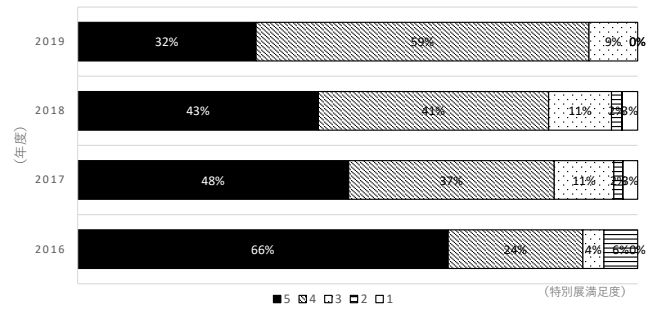


図5 特別展アンケート結果：5段階評価の満足度の傾向（5：とても満足，4：満足，3：ふつう，2：不満足，1：とても不満足）

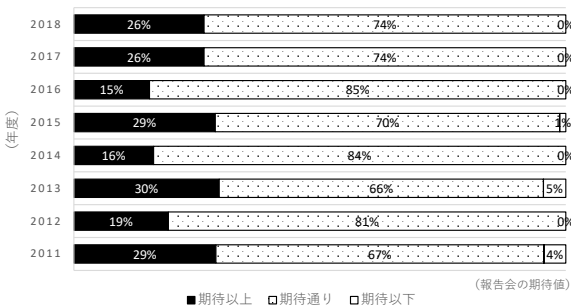


図2 報告会アンケート結果：報告会は期待通りだったか？

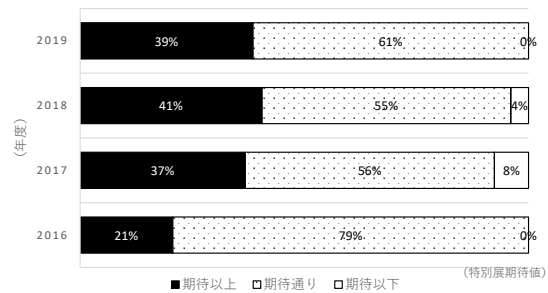


図6 特別展アンケート結果：報告会は期待通りだったか？

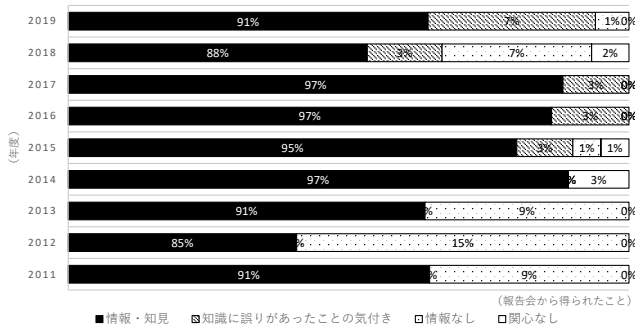


図3 報告会アンケート結果：報告会から得られたことがあったか？

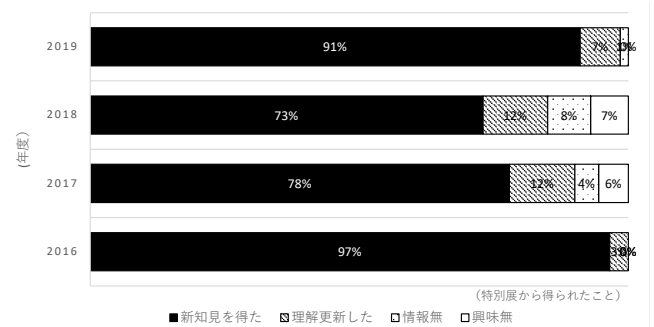


図7 特別展アンケート結果：報告会から得られたことがあったか？

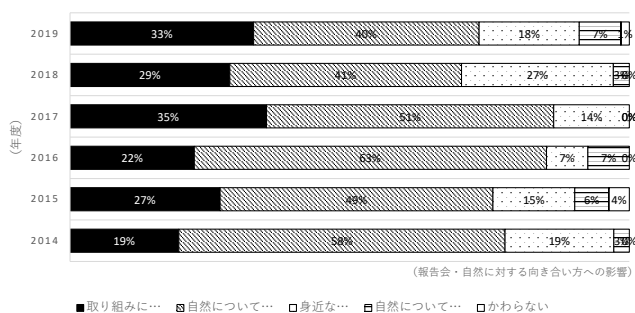


図4 報告会アンケート結果：報告会で得られた知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか？

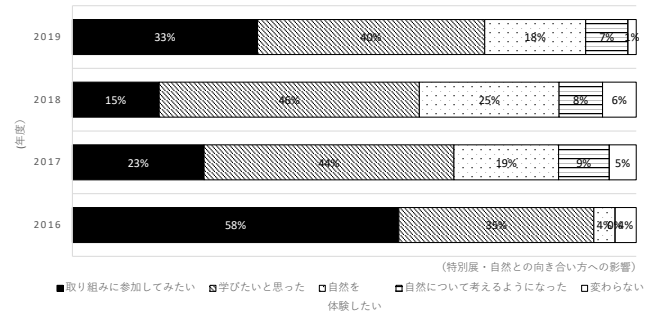


図8 特別展アンケート結果：報告会で得られた知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか？

たせるようにした(表1-1)。参加団体の増加にともない、ポスター発表数も増加した(表1-1)。第7回(2014年度)までは報告会のみで開催であったため2月に実施していたが、第8回(2015年度)からは特別展となったため、報告会は展示オープン初日に開催した(表1-1, 1-2)。報告会参加者数は80人~179人と推移した(表1-1)。報告会のアンケートをみると(表2, 図2)、第4回(2011年度)から第7回(2014年度)は5段階の満足度スケールのうち、5が最も多く76%~93%を占めていた。しかし、第8回(2015年度)は5の占める割合が著しく減少し、2018年度まで4が最も多く占める結果となった。第12回(2019年度)は5の占める割合が52%と、ふたたび過半数を占めるようになった。報告会が期待通りだったかについては、第11回(2018年度)までデータがとれているが(表2, 図3)、期待以上が第5回(2012年度)、第7回(2014年度)、第9回(2016年度)で減少が認められ、期待通りが66%~85%を占めた。期待以下の回答があったのは、第4回(2011年度)、第6回(2013年度)、第8回(2015年度)であった。報告会から得られたことがあったか?については(表2, 図4)、情報・知見を得たとの回答が85%~97%と最も多かった。また、知識の誤りに気づいたが3%~7%を占めた。報告会で得られた知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか?については、第7回(2014年度)よりデータをとっているが(表2, 図5)、自然について知りたいが最も多く40%~58%を占め、次いで、取り組み参加してみたい19%~35%、身近な自然をみてみたい7%~27%が占めた。

報告会アンケートにおける要望等のコメントは表3に示した。「ポスター会場がせまい」「(口頭発表の)一つ一つが短くて残念」「発表の周知をはやめにしてほしい」「ポスター展示をこの場だけでなく、じっくり見られるよう数日設けて欲しい」「博物館が連絡し、高校のクラブ活動の横野連携をとったらどうだろうか」「群馬県の現状について知ることが大切なのでポスター発表の時間をもっとしてほしい」等、設営、運営に対する要望、提案のほか、「昨年より充実していた さらなる発展を期待」「群馬県のレッドデータ関係について知りたい」「森林活用についての報告」「魚類の発表」「生物に片寄らず地質等の分野の過去と現在と未来に期待します」等、発表内容のさらなる充実化についてもコメントが寄せられた。

第8回(2015年度)から開始した特別展については、開催期間中の来館者が第8回(2015年度)10,263人、第9回(2016年度)11,792人、第10回(2017年度)12,068人、第11回(2018年度)13,972人、第12回(2019年度)16,894人と増加した(表1-1)。第9回(2016年度)からアンケートデータが得られ

ているが(表4)、満足度では第9回(2016年度)から第12回(2019年度)にかけて5が66%から32%へ減少傾向にある一方、4が24%から59%と増加した(図6)。一方で、特別展は期待通りだったか?については、期待通りが最も多く(図7)、期待以上は第9回(2016年度)から第10回(2017年度)にかけて期待以上が21%から37%に増加したがその後は大きな変化は認められなかった。特別展で得られた知見は自然に対する向き合い方に影響を与えたか?については、第9回(2016年度)に取り組みに参加してみたいが最も多く58%を占めたが(図9)、第10回(2017年度)に減少し、自然について学びたい、自然を体験したいが多く占める傾向が認められた。

特別展アンケートの要望等記述部分は表5に示した。「まだ聞いてない発表を聞いてみたい」「石をテーマにして欲しい。群馬の鉱山、鉱物等」「群馬の民俗風習と自然の関係」「今回はいろいろな機関の目線から展示されていて大変興味深かった」等、展示内容のさらなる多様化を求めるコメントと、内容を充実化させてきたことへの評価的なコメントがあった。一方で、「展示内容がむずかしい」「字が多くて見るのに疲れる。もっとわかりやすく簡単に」「もう少し引きつけるような展示にした方がいい」「もう少し遊べる所や体験できる場をもうけた方がよいと思います」等、展示表現や、より一般向けの内容の導入への要望等が認められた。

## 考察

ぐんまの自然は、エポックメイキングな事態が発生する度に、時代のニーズをとらえ、その存続をかけて柔軟に対応しながら継続してきた。鳥獣害対策をメインとした行政的な報告会から、報告会=生物多様性の垣塙とその設定を大きく変え、報告会+特別展となることで、「多様な主体が集い繋がる場」の輪を広く一般にも広げるようにしてきた。

事業を展開する中で、一貫して大切に守ってきたのは参加団体と「ともに歩む」ことであり、参加者の声を受け、より良い内容に修正・改善するボトムアップ方式である。報告会については、第4回(2011年度)から第7回(2014年度)は5件法で満足度5が大多数を占める高評価の状態が続いた。しかし第8回(2015年度)から満足度が低下して、満足度4が多数を占めるようになった。この傾向は第11回(2018年度)まで続いた(図1)。第8回(2015年度)は、第7回(2014年度)と比較して報告会の内容が期待以上の割合に増加が認められたが、一方で、期待以下が1%認められた年度でもあった(図2)。第8回(2015年度)報告会の



満足度が前年までにくらべて下がった原因は、表3の2015年の記述にあった「若い人とベテランの発表をバランスよく組み合わせたい」とのコメントを踏まえると(表3)、口頭発表のプログラム構成と発表内容に関する満足度が低かったことに起因することが伺える。口頭発表は、第6回(2013年度)は7本(すべて自然保護保全団体、試験場等で構成)、第7回(2014年度)は5本(高校2本、自然保護保全団体・試験場等3本)、第8回(2015年度)は5本(高校3本、自然保護保全団体・試験場2本)と発表件数が7本から5本に減少し、保護保全団体・試験場等の発表件数も減少した(群馬県, 2014, 2015, 2016)。参加者の多くが求めているのは「来年も新しい知識が得られるよう、おもしろい発表をしてほしい」(表3)であり、当日の会場内でも同様のコメントを複数人からいただいた。このような率直な意見や助言を踏まえ第9回(2016年度)は口頭発表のプログラムの組み方を再検討し、高校1本、自然保護団体1本、大学1本、県水産試験場1本、博物館1本で構成した(群馬県, 2017)。満足度5が顕著に増加することはなかったが、少しずつ増加し、第12回(2019年度)には50%を超えるまでになった。一度、期待値に届かない展開をした場合、評価、信頼を回復するには数年のオーダーで時間がかかると言えるだろう。報告会の参加者は、報告会の発表者とその関係団体が主体であるが、報告会に参加したことで観察会等自然に関する取り組みに参加したいと回答した割合は第7回(2014年度)から第12回(2019年度)にかけて微増傾向にある(図4)。自然について知りたい、との動機から、取り組みに参加してみたい、との行動変容を誘発できるような内容に、さらに充実化させていく必要がある。

特別展については、満足度5が減少する一方、満足度4が増加傾向にある(図5)。また、第10回(2017年度)については満足度1の回答も確認された。展示の期待値をみると、第10回(2017年度)は第9回(2016年度)に比べて期待以上が増加しているが、一方で期待以下だったとの回答が第10回(2017年度)、第11回(2018年度)に認められる(図6)。特別展から得られたことについても、第10回(2017年度)、第11回(2018年度)では新知見を得たがいずれも73%、78%、自然への更新した12%とあわせて85%、90%を占める一方、興味無いが6%、7%を占めていた。記述をみると第10回(2017年度)は今後の展示内容等への要望であったが、第11回(2018年度)は「子ども達ももっと興味を持てるような体験型のなにかがあると良い」「体感(手にふれたり等)の設備がもう少しあればたのしい」「もっと展示してある物が増えること」等、楽しむ体感型展示への要望が寄せられた(表5)。これは「特別展」に対して、当館の

常設展や通常行っている企画展的な展示を回答者が期待していたことが伺える。博物館におとずれる一般的な来館者の来館理由は、博物館に遊びに来た、常設展示をみにきた、企画展/特別展をみにきた、学校等の遠足などで来館した、団体旅行で来館したなど様々である(e.g.姉崎2021)。特別展を目的に来館した層以外の来館者に対して、展示としての配慮が必要であったことを示唆している。

特別展の主役は参加団体によるポスターである。ただ、特別展を媒介として「多様な主体が集い繋がる場」の輪を一般にも広げていこうとするのであれば、ポスターを掲示するだけではなく、標本や体験型展示を含めた楽しく居心地の良い空間づくりを意識して構築して提供することで、ポスター発表と来館者との間を橋渡ししうまくいくようになるのではないかと考えられる。そこで、第12回(2019年度)には、特別展の導入の部分に最近話題になっている群馬県自然史に関わる出来事をビジュアル的に紹介する「ぐんまホットトピックス」コーナーを新設し、博物館収蔵の剥製等の標本展示に加えハンズオン展示等の体験型展示も多数設置した。また、参加団体については、それぞれ映像等の展示が増えたほかに、群馬県野生きのこ同好会の快諾により、「群馬県野生きのこ同好会」による「きのこのおえかき」参加型展示や、武蔵野美術大学による「自然史の多様な側面を伝える博物館の活用方法を軸とした」「サイエンスとアートの協同」の視点からの展示(群馬県立自然史博物館2019)も設置され、自然史をとらえる多様な視点への誘いも行われた。その結果、第12回(2019年度)の特別展満足度は5の32%、4の59%をあわせて91%となり、1は0%となった(図5)。また、特別展から得られたことについては、新知見を得たが91%に増加し、興味無きが0%となった。

展示のみならず、「特別展で子供も楽しめるようなイベントを増やして欲しい」等の要望にも柔軟に応えられるよう、第13回(2020年度)には、参加団体によって「ワクワク体験、遊びと学びを結ぶ体験、森と自然の保育園」ワークショップの開催も企画された。ワークショップは新型コロナウイルス感染症拡大によって中止となったが、今後も、魅力ある展示と、戦略的な教育普及プログラムの提供の両側面を充実化させていくことで、生物多様性の保全と持続可能な社会の普及啓発を効果的に行っていくことにつながるのではないかと考えられる。

ぐんまの自然の13年間の歩みは、ばらばらだった点と点をつなげるように輪を広げ、参加者の声を受けながら新たなインフラを創造、整備することの連続だった(e.g. Schumacher, 1993)。対象とする内容、関係団体、事業形態、

運営体制、運営方法に至るまで、何一つ原型を留めていない。そのときどきの課題に柔軟かつ順応的に対応することで、継続させることができたのかもしれない。日頃の関係性の中で課題を事前に察知し、早期解決を図りながら柔軟に変化し続けることが存続の鍵といえるだろう。変わらないのは、いまある関係を深めながら新しい関係も築き、日頃から関係団体の熱意やエネルギーを受け止め、その魅力を学び、ともに歩み、それが私たちが育ててくれていることである。今後も自己都合を優先させるのではなく、関係団体や来館者の声を真摯に受け止めながら、より良いかたちを模索し、目指していくことが、持続可能な活動につながるものと考えられる。

## 謝辞

群馬県環境森林部自然環境課、群馬県立ぐんま昆虫の森をはじめ、ぐんまの自然に関わってくださる皆様に、深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 姉崎智子 (2021) : 来館者の行動観察と自由記述 : 企画展「『海の森』の試み～山・川・海のつながりを伝える～」を例として。群馬県立自然史博物館研究報告, 25:123-134.
- 群馬県 (2009) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2008年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2008](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2008), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2010) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2009年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2009](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2009), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2011) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2010年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2010](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2010), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2012) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2011年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2011](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2011), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2013) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2012年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2012](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2012), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2014) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2013年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2013](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2013), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2015) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2014年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2014](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2014), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2016) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2015年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2015](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2015), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2017) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2016年度。ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集-2016, (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2018) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2017年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2017](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2017), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2019) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2018年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2018](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2018), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県 (2020) : ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会要旨集2019年度。  
[http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report\\_summary/reportsum\\_2019](http://www.gmnh.pref.gunma.jp/research/report_summary/reportsum_2019), (閲覧日2020-1-19).
- 群馬県立自然史博物館 (2019) : 平成29年度自然史博物館活動に対する評価について。  
<http://www.gmnh.pref.gunma.jp/museum/introduction/assessment/2017-2>, (閲覧日2020-1-19).
- Lalou, Frederic (2014) : Reinventing Organizations: A Guide to Creating Organizations Inspired by the Next Stage of Human Consciousness (English Edition). Nelson Parker, pp.592. (kindle edition).
- Schumacher, E.F. (1993) : Small is Beautiful: A Study of economics as if people mattered. Vintage Books. pp288.